

新たな迫害と教会の祈り

2022年9月18日

使徒の働き 12章1～17節

序：11章 アンティオキア教会（異邦人伝道の拠点）の設立
13章 パルナバとサウロが派遣される（異邦人への宣教開始）

本日の12章：エルサレム教会への迫害、使徒ペテロの投獄と救出、迫害者の死

I. エルサレムでの新たな迫害

ヘロデ・アグリッパⅠ世が、エルサレム教会の使徒たちを迫害
イエスを殺そうとしたヘロデ大王の孫 AD 41~44年在位

(1)ヨハネの兄弟ヤコブを斬殺（使徒の中の殉教者）

最後 最初

イエスの預言「あなたがたはわたしの飲む杯を飲む」 マルコ 10:39

理由：ヘロデ家はイドマヤ人との混血（血統は純粋なユダヤ人でない）
ローマ皇帝からユダヤ・サマリアの支配・統治を任された
保守的なユダヤの社会に取り入れるため、歓心を買おうとした
ユダヤ民衆の人気取りのため、教会を餌食にした
反感・不満

(2)ペテロを捕縛・投獄・殺害を計画

理由：ヤコブ殺害がユダヤ人に気に入られたのに味をしめて、次はペテロ
過越の祭りの時期（多くの群衆がエルサレムに上ってくる）を予定

II. 使徒ペテロの投獄と救出

(1)ヘロデ王が主導（捕縛・投獄）

過越の祭りの後に公開処刑の予定（さらしもの、民衆の熱狂）

(2)厳重な監視

4人1組×4組 = 16人の番兵（牢の戸口、牢の中）
2本の鎖につながれ、二人の兵士の間で寝る

自力で逃げ出すことは、絶望的に不可能

(3)救出

引き出される前夜

突然、主の使いが出現、光が牢を照らす（番兵たちは気づかない）

熟睡していたペテロを起こし、指示

急いで立ち上がれ（手の鎖が落ちた）

帯を締め、履物をはけ

上着を着て、ついて来よ

ペテロは夢うつつの状態に従った

第一、第二の衛所は気づかれず通り過ぎた

最後の難関＝町に通じる鉄の門がひとりでに開いた

外（町の通り）に出てから、御使いは離れ去った

(4)ペテロの認識

我に返った

主が、ヘロデの残虐な手、ユダヤ人たちの敵意・憎しみの血祭りになる災い
から、私を救い出してくださった

人間の助けや介入は皆無 主の救いの御業あるのみ

(5)ペテロの行動

マルコと呼ばれているヨハネの母マリアの家に直行

イエスの受難の前夜以降、信仰の仲間が集まる所（教会堂がなかったため）
マルコはパルナバのいとこ

Ⅲ. 教会の祈り

- (1) ペテロのために、熱心に祈り続けていた（とりなしの祈り）
神と聖徒のホットラインは祈り（戦いにおける最強最大の武器は祈り）
- (2) ペテロが訪れた時の反応
ロダという女中が応対、声だけでペテロと分かる、門を開けるのも忘れて奥に駆け込み、皆に知らせた
外に立たされたままのペテロは、追っ手が来るのを懸念して気が気でない
- (3) ロダと祈っていた人たちのやりとり
「ペテロがいるとは信じられない」「いや、ほんとうだ」
「ペテロではなく、守護天使だ」
- (4) 叩き続けるペテロ、彼らは門を開ける
驚き、興奮、喜び
祈りが聞かれたことが信じられない
- (5) ペテロの説明（主が彼にしてくださったこと＝彼らの祈りの答え）
主の兄弟ヤコブとほかの使徒たちに伝えるよう依頼
- (6) ペテロの退去
長居は身を危険にさらす
エルサレムにはいられない

Ⅳ. 結び

- (1) 為政者による弾圧・迫害は歴史の中で繰り返されている
大衆・群衆心理を悪用・操作する（プロパガンダを拡散）
信教の自由、政教分離
- (2) 神はひとりひとりにそれぞれ御計画を持っておられる
同じ使徒であり、血を分けた兄弟でも同じではない
＝ヤコブは最初の殉教者　ヨハネは最後（パトモス島、黙示録）

ヤコブは斬殺され、ペテロは救出された（使命が終われば召天）

人間には、すべてを知ることはできない
- (3) 神がみこころを行われる時、誰も、何もそれを妨げたり止めたりできない
政治的効果、経済的効果、軍事的効果を計っても、水泡に帰せられる
- (4) 教会が苦境に喘ぐとき（主要な指導者を失う、信仰を棄てさせようと迫害）、
万物の創造者、支配者、審判者である神に祈ることができる
あれこれの人間的手段は無為
- (5) 祈りは神の力を引き出す（神は状況も人も世界も変えることがおできになる）
- (6) 一人で祈るだけでなく、教会（聖徒たち）がともに集まって祈る
- (7) 応えられると信じて、熱心に祈る
- (8) 必ずしも祈りが聞かれるわけではないと、疑いや不信仰な思いを持ちながら
祈ることがある　聖徒の間で衝突が起こることもある
祈りは、自分の意思に神のみこころを合わせることではない
神のみこころに自分の心に向け、高められ、神の御計画にあずかること